

どのような探究カリキュラムが学校図書館活用を促進するか - 生徒主体のテーマ設定と潜在的な知的好奇心を引き出すレファレンス -

清教学園 司書教諭 山崎勇気
(yamazakiyuki@seikyo.ed.jp)

2014年に「学校図書館賞」を受賞した清教学園は、これまでも図書館機能を活用する探究学習を推進してきた。学習者自身がテーマを決め、図書館を使って学ぶことを特色とする、中3生を対象にした授業「卒業論文『なんでやねん』」の取組みが実り、中等教育における学校図書館活用事例としてある程度の到達点を迎えていた。しかし、同じく探究学習を標榜する清教学園高校での授業「Global Studies」は、図書館からの資料支援も実らず、図書館が活用されない状況が続いていた。代わりに Web 資料(まとめサイトなど)が用いられ、文献調査を基本としない探究活動は深まりを見せなかった。「研究」の名を冠することも多い探究学習で、学問的誠実性が問われるこのような状況は、全国の探究学習担当者や、学校図書館関係者にとって共通の悩みでもある。

本実践では上記のような清教学園高校の状況を鑑み、長らく中学の卒業論文を指導してきた司書教諭が、高校「Global Studies」に授業者として参加。以下3つの問いを明らかにする調査・実践・検証を試みた。

- ① 授業に活用できる学校図書館の体制がすでに整っており、活用実績がありながらも、なぜ高校の探究学習では図書館機能が活用されないのか
→ 学習者(既卒生)と授業者(「Global Studies」3年以上の指導教諭)双方への取材調査
- ② 上記①の理由を踏まえた上で、高校の探究カリキュラムをどのように改訂できるか
→ 司書教諭が授業の立案から指導までを担い、「学習者主体のテーマ設定」にカリキュラムを改訂
- ③ 上記②のカリキュラム改訂が、学習者の学びにどのような影響を与えるのか
→ 授業で得られた各種統計データを用いて授業効果を検証

これらの調査・実践・検証から、「学習者主体のテーマ設定」が主体的な学びの前提条件であり、それを保証する探究カリキュラムが、学校図書館活用を促進することが明らかになった。そして、学校司書・司書教諭がレファレンスによって、生徒の「潜在的な知的好奇心」(=指導要領における「自ら見つける課題」)を引き出し、探究学習を深化させることがわかった。

<目次>

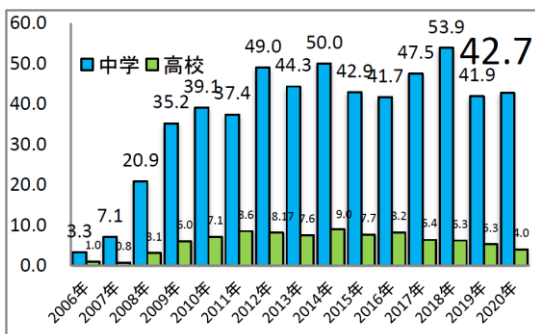
1. 実践の背景……………p. 2	5. カリキュラム改訂による効果の検証……………p. 10
2. 清教学園の探究学習実施状況……………p. 3	6. どのような探究カリキュラムが学校図書館活用を促進するか……………p. 17
3. 学習者(既卒生)・授業者への事前取材調査…p. 4	
4. 授業カリキュラムの改訂……………p. 7	7. 今後の展望……………p. 19

1. 実践の背景

(1) 清教高生は図書館を活用しない

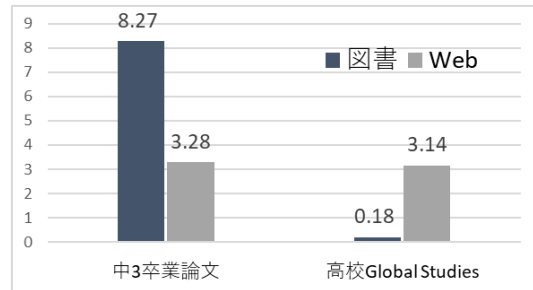
清教学園は、大阪府河内長野市に所在する私立の中高一貫校である。2014年に「学校図書館賞」を受賞した図書館「リブラリア」を有し、図書館機能を活用する探究学習を推進してきた。中学3年間の探究学習カリキュラム「リブラリア・カリキュラム」は、学習者自身がテーマを決め、図書館を使って学ぶことを特色とし、これまでも実践報告や出版物といったかたちで、成果が報告されてきた。とりわけ、司書教諭が中3生を対象にした授業「卒業論文『なんでやねん』」の取組みが実り、中等教育における学校図書館活用事例としては、ある程度の到達点を迎えていた。

しかし一方で、校内他教科における図書館活用は成功例が少ない。わけても、探究学習を標榜する清教学園高校の実践「Global Studies」は、全国の多くの学校と同様に、図書館機能の活用は芳しくない。2020年度の生徒一人当たり年間貸出冊数推移を参照すると、中学生は42.7冊であるのに対して、高校生は4.0冊に留まる(図1)。



清教学園中高生一人当たりの年間貸出冊数(図1)

同様のデータは生徒の学習成果物にも表れている。2020年度に中高生が探究学習の成果として残した、卒業論文や研究発表スライドを調査。「参考文献一覧」に記載された資料数にも図書館活用の大きな差がみられた。中3生が研究活動で用いた参考図書冊数が8.2冊であるのに対し、高校生は0.2冊に満



「参考文献一覧」記載資料数(図2)

たなかった(図2)。

これらのデータから、清教高生は学校図書館を活用していないという事実が明らかとなる。高校の探究学習「Global Studies」では、図書資料が参考文献として用いられず、また、学校司書のレファレンスといった図書館機能も活用されず、生徒の情報収集に際しては、体よくまとめられたWeb記事(まとめサイト等)で代用されている実態がわかった。

「研究」の名を冠することも多い探究学習で、学問的誠実性が問われるこのような状況は、全国の探究学習担当者や、学校図書館関係者にとって共通の悩みでもある。「主体的対話的で深い学び」を地で行くはずの探究学習は、本来であれば、学校図書館機能をこそ活用するはずだ。学習者は、先達によって著された図書資料や、それらを体系的に整理した書架、情報の収集・整理・保存に精通した学校司書・司書教諭の専門性を活用する必要があるからだ。にもかかわらず、高校の探究学習で図書館活用が進まない背景には、どのような理由があるのだろうか。

(2) これまでに行われた授業支援

清教学園の探究学習における、中高生の図書館活用状況を比較した場合、先述したような大きな差がみられる。しかし、高校の探究学習「Global Studies」に対して、これまで図書館からの授業支援を行わなかったわけではない。(図3)に示すように、授業テーマに合わせた選書と教室での出張文庫配置、授業

年度	授業テーマ	図書館からの授業支援内容
2017	新聞で196国探そう	・一人一部ずつの紙新聞を用意 ・「新聞の読み方」教材作成と指導 ・新聞データベースの契約開始と提供
2017	南大阪の課題を見つけ社会起業を提案する	・関連図書100冊を選書し出張文庫設置 ・「公共政策」に関する基礎資料を教材作成 ・「テーマ設定の手法」教材作成と指導
2017 -現在	ファッション産業と世界のグローバル化	・関連図書50冊を選書し出張文庫設置 ・「ラナプラザビル崩落事故」教材作成 ・得た情報をどう共有するか、授業案
2017 -現在	参考文献の探し方	・図書館活用の方法指導 ・一次、二次情報等、情報の種別を指導 ・「レファレンス依頼書」制度化
2019 -現在	Web検索の方法	・「Webサイトの見極め方」教材作成と指導 ・ドメイン検索、論文検索等の手法を指導

高校「Global Studies」に対する授業支援（図3）

担当の教科教諭と連携して単元やプリント教材を開発、レファレンスの依頼書・回答書を作成し図書館への資料支援を啓発するなど、継続的な授業支援策を講じてきた。しかし、2017年から開始したこれら授業支援は、(図1)や(図2)のデータからも明らかのように、高校生の図書館活用を促す策として抜本的な実践とはなり得なかった。時間と労力をかけ図書館からの支援を行っても、その効果が実際のデータに現れないことは、図書館スタッフにとっても長年の課題だった。

(3)本実践の概要

このような背景から、清教学園図書館は「学校図書館の活性化に向けた調査研究委託事業」(文科省,2021)に参加。授業カリキュラムの改善施策を中心とした、実践的研究を行った¹。具体的には、次に示す3つの問いを明らかにすることを試みた。

- ① 授業に活用できる学校図書館の体制がすでに整っており、活用実績がありながらも、なぜ高校の探究学習では図書館機能が活用されないのか
- ② 図書館機能が活用されない理由を踏まえた上で、高校の探究カリキュラムをどのように改訂できるか
- ③ カリキュラムの改訂が、学習者の学び

にどのような影響を与えるのか

上記の問いを明らかにするために、学習者・授業者双方への取材調査と、司書教諭が授業に関わることによるカリキュラム改訂を行った。さらに、年度末の授業振り返りアンケート、図書館利用統計データ、学習成果物を分析した。探究学習で学習者の主体性が真に発揮されるためには、どのようなカリキュラムが妥当か。そのカリキュラムの中で、学校図書館機能はどう活かされ、学習者の成長に資するのか。授業改善施策と効果検証が、本実践の主題である。

2.清教学園の探究学習実施状況

(1)中高で実施される三つの「探究学習」

No.	実施学年 (授業名称)	授業 担当者	学習 テーマ	テーマ 設定主体	学習者 単位	学習成果物 形式
1	中3 卒業論文 「なんでやねん」	司書 教諭 (2名)	学習者の 興味関心	学習者	個人	① 論文執筆 (1万字程度) ② ポスター (A4判/2p)
2	高1 Global Studies I	教科 教諭 (2名)	社会課題 (SDGs)	授業者	グループ (4名程度)	発表スライド (日本語/10枚)
3	高2 Global Studies II	教科 教諭 (2名)	社会課題 (SDGs)	授業者	グループ (4名程度)	発表スライド (英語/10枚)

清教学園における三つの「探究学習」(図4)

実践を開始した2021年度当初の段階では、清教学園の探究学習は大きく三つに分けられた(図4)。それぞれの授業担当者や成果物の形式は異なるが、「テーマを設定」「学習者自身が情報資源を活用して調査」「問い/結論/根拠を対応させた学習成果物を作成」という点では共通し、いずれも一般的な「探究学習」の形態と呼べる。

このうち、中学で実施する「卒業論文『なんでやねん』」(図4/No.1)は、司書教諭2名が1単位で授業を担当する。探究の題材は学習者一人ひとりが興味・関心などから決定。文献調査やフィールドワーク(専門家への取材/実験/観察/社会調査等)を通じて学びを深

¹ 本稿は同委託研究事業で文部科学省に提出された実践報告「探究学習と図書館活用のギャップを埋める授業実践の検討」に、さらに詳細な分析と新たなデータを加えたものである。

め、詳細なテーマを決定する。授業者は学習者のテーマ決定に介入せず、研究指導や資料支援を通じてサポートに徹する。例として「人と鳥はどのようにして共存していくべきか：過去の文化的関わりを参考に」「ジブリ飯はなぜ美味しそうに見えるのか：『食べる』から『生きる』を表現する」「なぜ無印良品は『シンプル』であることを売りにするのか：装飾を抑えたデザインによる、商品自体の魅力の発信」などがある。最終的には平均1万2000字程度の論文に仕上げられ、年度末には学習者全員が、ポスターセッションによる口頭発表を行う。

一方、高校で実施する「Global Studies」(図4/No.2・No.3)は、一般教科の教諭2名が1単位で授業を担当する。生徒が探究するテーマは、授業者の主導で「社会で解決すべき課題(SDGsで挙げられる諸課題)」といった大枠が設定される。その枠の中で、学習者がグループごとに詳細テーマを決定し、研究に取り組む。例として、「途上国の識字率を上げるためには」「海洋プラスチック問題を解決するためには」「日本のジェンダーギャップ指数を改善するためには」などが挙がる。最終的には発表スライド10枚程度にまとめ、課題解決のためのアイデアをプレゼンする。高1・2の学習形態はほぼ同じで、プレゼン時の言語を英語とするか、日本語とするかという点でのみ異なる。

(2)テーマ決定のイニシアチブを誰が握るか

中高で実践される上記三つの探究学習において、最も異なるのは「テーマ決定のイニシアチブを誰が握るのか」という点である。中学「卒業論文『なんでやねん』」では、学習者が自らの興味・関心に基づいて題材を決定し、学ぶ中で探究テーマを絞り込んでいく。これに対して、高校「Global Studies I・II」ではSDGsといった授業者主導のテーマ設定

の中で、探究テーマを絞り込んでいく。

同じく探究学習を標榜し、研究し結論を出すという授業設計であっても、学習者と授業者どちらがテーマ決定のイニシアチブを握るのかによって、図書館活用や学びの過程が大きく異なるのではないかと。司書教諭として長く探究学習の指導を担ってきた身として、このような仮説を持っていた。この仮説に基づき、学習者・教科教諭双方に取材調査を実施し、実情を明らかにすることを試みた。さらに、取材結果を高校の探究カリキュラムに反映させることを目指した。

3. 学習者と授業者への事前取材調査

学習者と授業者が図書館を活用し辛い理由は何か。それを明らかにするべく、事前の聞き取り調査を行った。調査時期はいずれも2021年2月~3月にかけてである。

(1)学習者(既卒生)への取材

学習者を代表する意見として、清教学園中学・高校それぞれで探究学習を履修した既卒生2名に取材。「なぜ図書館を使った/使わなかったのか」「授業の設計が自分の図書館活用にどう影響したか」などを質問した。

取材した既卒生はいずれも、中学・高校での探究学習経験をもとに進路志望・開拓に至っており、いわば「探究学習に対する高い志向」を有していた学習者である。このような既卒生への取材からは、中高での探究学習経験として次のような意見が得られた。

(中学：卒業論文「なんでやねん」)

- ・中学では自分自身でテーマを考えた。興味がある題材なので読書は楽しかった
- ・論文にまとめる成果物形式なので複数資料を用いた文献調査が必要不可欠だった
- ・テーマが深まっていくうちに新しい本を読む必要性が生まれた。一年中本を読んでいた

・重要な文献と出会った。参考文献の著者への取材が、進路選択等、自分の人生に大きな影響を与えた

・個人研究なので、良くも悪くも全て自分の責任で一年が過ぎていった。テーマが決まらない生徒は辛そうだった。

(高校 : Global Studies)

・SDGsの中から自分たちで世の中の課題を決めたとしても、わざわざ本を読んで学ぶ意欲は湧かなかった。授業では「自分ごととして考える」ことが求められても、それは難しいことに思えた

・ポスター発表のスライドづくりなら、本を読まずとも Web 資料で十分だった

・グループ学習なので、役割分担などによって協働での学習ができた

・グループ学習では、他の生徒が決めたテーマには乗り切れず、興味もわからない。一方で、自分がグループの中でテーマ決定を主導すれば、他の生徒が「フリーライダー」になって、自分の責任が増えるだけだった

これら既卒生への取材からわかるのは、高校の探究学習において図書館が活用されない原因として、「テーマ決定のイニシアチブが自分自身にないこと」「それ故に課題に対して前向きになれないこと」「前向きになれない以上、図書館活用もされていないこと」などが読み取れる。さらに、成果物の形式(論文/発表スライド)、学習者単位(個人/グループ)などが複合的に絡み合い、生徒の主体性が発揮され辛い状況になっていたこともわかる。

本校が 2019 年に実施した、中学卒業論文の経験を振り返る既卒生へのアンケート調査²でも、今回の取材結果と関連するデータ

が示されている。「(自分に子どもがいると仮定して)卒業論文の授業を自身の子どもに勧めるか。その理由は何か」という問いに対しては、「自分で自由にテーマを決める研究経験」が推薦理由として最も多く挙がっていた。

既卒生から得た意見をまとめると、探究学習がよい経験となるためには「学習者自身がテーマを自分で決められること」「学習者自身がテーマに興味を持っていること」が前提にあることがわかる。そしてこのような前提は、学習指導要領の総合・探究の目的の第一「自ら課題を見つけ自ら学ぶ」とも対応する。指導要領が示す前提が保証されてはじめて、学習者の主体性が発揮され、活発な図書館活用や、高度な研究活動に至らせることが示唆される。

(2)授業者(教科教諭)への取材

既卒生への取材では「学習者がテーマを自分で決められること」「学習者がテーマに興味を持っていること」が、よりよい探究活動や図書館活用の前提であることが示唆された。では、過去に高校の「Global Studies」で授業を担当した教科教諭は、どのような意図でカリキュラムを作成し、指導にあっていたのだろうか。同授業で3年以上の指導経験がある教科教諭2名(情報科/社会科)に取材した。取材では「授業をどのように設計したか」「テーマ設定をどう考えるか」「どのような点で(学習者・授業者にとって)図書館が活用し辛いのか」などを質問した。

(探究のテーマ設定)

・探究テーマは「社会課題」を扱い、生徒にはその解決策を検討させたい。生徒の興味関心に任せていては、エンタメのような題材が選択され、成果物も「調べ学習」に終始する

² 添付資料 2『自由にテーマを決めて学ぶ探究学習が生徒の学習観にどのような影響を与えたか:「卒業論文」を振り返る、15歳から28歳へのアンケート調査』(山崎ほか,2020)

・中学卒業論文のように、生徒が好きなことや興味関心のあることを学ぶのは「調べ学習」。高校では発達段階も鑑み、社会課題の解決策を検討する「探究学習」にしたい

・生徒の興味や関心に基づく多様なテーマ設定や、グループによらず生徒が個人で学習することは、教員の配置上、指導が難しくなる

(図書館の活用)

・図書館を使うべきだと思う。しかし、1単位という少ないコマ数で、授業時間内に施設を利用させることは、時間的制約から難しい

・読書を推奨するが、たくさんの文献を読み込む学習スタイルが合うのは一部の生徒。多くの生徒にとってはハードルが高い

・生徒が私物情報端末を持っているので、Webで調べて完成させられる程度の課題負荷が、忙しい生徒にとっても丁度よい

これら教科教諭への取材からは、高校の探究学習において図書館が活用されない要因として、「教員主導のテーマ設定への拘り」と、「探究学習に対するコスト意識」の二つが読み取れる。まずもって教科教諭は「探究テーマは社会課題の解決策検討であるべき」と考えており、とりわけ中学卒業論文で盛んにテーマとして挙がるような「メディア研究」「文化研究」「コンテンツ研究」などには、探究テーマの対象として意義を感じられないようだった。「興味があることを学ぶのは『調べ学習』であり、社会課題の解決策模索は『探究学習』である」という教科教諭の認識からは、学ぶ題材・分野によって授業者自身の判断基準による「深さ」や「よさ」のようなものが実感されていることがわかる。ここで語られた教科教諭の「調べ学習」と「探究学習」の認識は(図5)のように整理することができる。

先の既卒生への取材結果を参照するなら、上記の認識に基づく授業設計が、「興味が無

	発達段階	テーマ動機	分野の例	深さ	よさ
調べ学習	中学まで	興味・関心 好きなこと	アニメ 漫画 K-POP	↓ 深い	↓ よい
探究学習	高校以上	社会課題 解決策模索	貧困問題 環境問題 教育問題		

調べ学習と探究学習に対する教科教諭の認識(図5)

いテーマの本は読まない」という学習者の行動に繋がっていたことがわかる。また「探究学習では図書(図書館)が活用されるべき」と意識しつつ、時間的制約のある授業という場では、「指導・生徒負荷の両面でコストがかかる」と感じていることもわかる。図書館機能の活用は、学習者に対して授業外での資料探索や読書を求めるため、「一部主体的な生徒が図書館を使うのは推奨したい。しかし、全体への指導では、適切なWeb検索だけで課題作成が済むようにしたい」との意見も得られた。

	求める理想像	実際の生徒の様子	教員の意識
学習態度	自ら主体的に学んでほしい	社会課題に興味がなく主体的に学ばない	→ある程度仕方ない
学習時間	授業外も積極的に学んでほしい	部活と主要教科の学習で忙しい	→課題は授業時間で済むよう授業設計
資料活用	安易なWeb利用に頼らず図書も活用してほしい	図書館機能の活用はハードルが高く、Web資料がほとんど	→適切なWeb利用で資料活用を賄いたい

探究学習指導上の理想と実態(図6)

もちろん、授業者自身をはじめから意図して「コスト」を意識するわけではない。(図6)に示すように、探究学習で生徒に求める理想像としては「主体的に学んでほしい」「授業外でも積極的に取り組んでほしい」「図書館活用もしてほしい」などが挙げられた。その一方で、実際の指導ではそうもいかない現実が、授業者に「コスト」を意識させている。

部活、主要教科の課題、受験勉強等、多忙な状況にある学習者にとって、探究学習の課題負荷が大きくなることは、実際の問題としてある。多忙な状況は教員も同様であ忙しい日々の業務の中で、手間のかかる探究学習の指導を簡略化したいという意見は、教育現場の現実的な意見としては妥当だろう。

(3)何が「主体的な学び」を阻むのか

取材からは、高校の探究学習に対する学習者と授業者、それぞれの意図と事情が明らかになった。学習者の主体性が発揮され辛い要因として、「テーマ決定のイニシアチブが学習者自身にないこと」「テーマは社会課題の解決策模索であるべき」という授業者の教育観、「授業設計のコスト意識」の三つが要因であることが示唆された。そしてそのような状況が、学習者と授業者を図書館活用に至らせない背景にあることがわかった。

過去の学習成果物や、図書館の利用統計データを見ても、中高の探究学習の間には図書及び図書館の活用について非常に大きな差がある³。等しく「探究学習」を冠する授業であっても、授業設計や指導の方法により、図書館活用が大きく変化する。

しかし、取材した教科教諭がとりわけ授業設計上の「コスト」について言及していたように、学校経営全体にまで視野を広げた場合、探究学習の教員数・授業コマ数といったリソースや、探究学習に費やす生徒の可処分時間の分配を考慮せざるを得ない。学校が自校の教育方針として、部活動、教科指導、探究学習、いずれかに注力するのか。あるいはいずれも大切にしながらバランスのよい教育活動を展開するのか。今回の取材からは、単にひとつの授業のカリキュラム改訂や、図書館と授業者の関係づくりといった実践にとどまらない、学校経営そのものを包括的に検討せざるを得ない状況が垣間見えた。

とはいえそのように根の深い問題は、一朝一夕の実践では解決をみない。次項では、今回の取材から明らかになった「テーマ決定のイニシアチブ」の重要性、そこに着目した授業カリキュラムの改訂の詳細を報告する。

4. 授業カリキュラムの改訂

実践を行った 2021 年度は、これまで中 3 の探究学習「卒業論文『なんでやねん』」の授業を担当してきた司書教諭(本稿筆者)が、高 2 の探究学習「Global Studies II」に授業者として参加した。過去に実践してきたような、「Global Studies」に対する図書館からの資料支援という立場⁴ではなく、実際に授業カリキュラムの立案に関わり、学習者を指導する機会を得た。この機会を利用し、授業カリキュラムの改訂、図書館からの資料支援のさらなる充実を図った。そして、そのようなカリキュラム改訂による効果の検証を行った。対象となる授業の概要は次のとおりである。

名称：Global Studies II

教科：総合的な探究の時間/1 単位

対象：高校 2 年(401 名/10 クラス)

担当者：3 名(教科教諭×2/司書教諭×1)

6 クラス/教科教諭 2 名

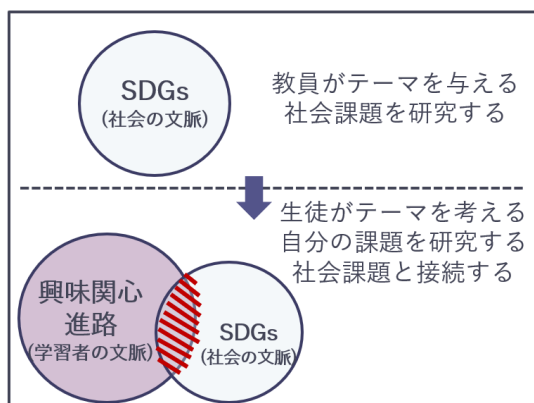
4 クラス/司書教諭 1 名・教科教諭各 1 名

(1)テーマ設定の主体を授業者から学習者へ

先に実施した学習者と授業者に対する事前取材からは、生徒が主体的学びに向かわない、研究テーマに興味を持たない原因に、授業者主体のテーマ設定があることがわかった。そこで、「SDGs」のような社会的文脈からテーマ設定するのではなく、まずは生徒の「興味・関心」「進路・キャリア」といった、学習者自身の文脈からテーマ設定を行わせ

³ 本稿 p.2(図 1・2)参照

⁴ 本稿 p.3(図 3)参照



学習者の文脈からテーマを考える授業設計(図7)

た(図7)。授業担当者からは「まずは自分が興味のある分野を学ばなければならない。面白く研究できなければ、すぐに題材を変える」「どのような分野であれ、研究の意義は見つかる。SDGsのような『社会的な文脈』には、あとからいくらでもつなげることができる」などと指導した。

この段階で生徒が選んだ題材には、以下のようなものがある。

- ・キャラクターの描き方
- ・ハマるゲームデザイン
- ・高校生の髪型の流行
- ・大学受験
- ・南大阪の経済衰退と人口低下
- ・スポーツ指導者や教師の体罰
- ・自動車
- ・メイドインジャパンの復権
- ・デートで「男が奢る」のはなぜか
- ・ジェスチャー
- ・方向音痴の原因と対策
- ・教師の依怙最厚

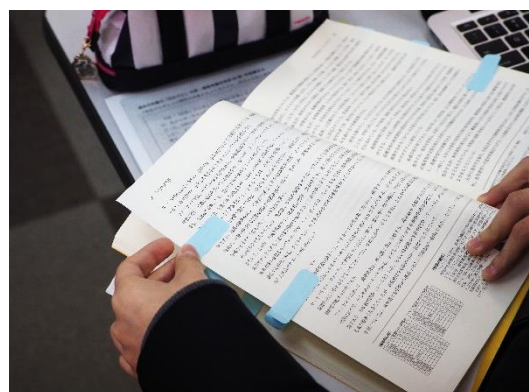
上記は一部ではあるが、「発展途上国の支援」「環境問題」一辺倒であった前年と比べても、多様な題材が出揃いつつあった。これら「自分たちが興味を持った題材」について、図書館の蔵書を中心に複数の参考文献を集め、読書し、ある程度研究が進んだのちに、

社会課題との接続を検討させた。換言すれば、授業者が学習者にテーマを与える探究活動から、学習者が自らの進路志望や興味・関心に基づき学び、その後テーマを設定する探究活動へ、授業カリキュラムの改訂を行ったのである。

さらに、無作為に学習者を選んでいた前年度までのグループ分けも見直した。年度はじめに、生徒それぞれが希望する進路分野を調査。進路志望分野が近い生徒どうして学習グループを組んだ。グループ内の生徒どうして相談させ、メンバーの興味関心や進路志望に近い研究テーマを設定。指導の都合上個人研究が難しくとも、可能な限り個々の生徒の興味関心が、グループとしての研究テーマと対応するように工夫した。

(2)司書教諭による授業と研究指導

一部のクラスは司書教諭が授業を主担。図書館に併設された特別教室「総合学習室」で授業を行った。授業では資料収集に関する指導を充実させ、図書館やWeb資料をどのように使うかを、年度を通じて継続的に指導。とりわけ従来のカリキュラムでおざなりになっていた、ノンフィクション図書の活用方法、文献からの引用手法の徹底、文献著者と自分たちの意見の書き分け、ドメイン検索を中心としたWeb資料探索技術などを重点的に指導した(図8)。



付箋を貼る読書の推奨(図8)

また、前年度までは研究テーマを年度の早い段階(6月頃)で確定し、その後は「アクションプラン⁵⁾」と称する課題解決アイデアの検討に指導の重きが置かれていたが、2021年度はこれを変更。司書教諭が担当した授業ではむしろ、図書の精読と研究テーマ(問い)の検討を行きつ戻りつする「文献調査」と、自ら取材・実験観察・社会調査を行う「フィールドワーク調査」の二つの研究手法を推奨した。課題解決アイデアの創出よりもむしろ、研究活動に重きを置く活動へと変更した。

(3) レファレンス体制の充実

授業中の机間指導では、生徒の研究進捗を鑑みながらのレファレンスも兼ねた。生徒の話聞きながら関連資料を集め、机上に広げ、一緒に目次を開き、「どれなら使えそうか」「どれなら読めそうか」「自分たちの考えとどう関連しそうか」などと研究の進捗を鑑みながら、生徒と図書の出会いを見守った(図9-11)。次第に「この本読みましたよ、この章が面白くてー」といった生徒の声が増えていった。これら授業支援により、授業中の資料探索、読書、読んだ資料の生徒間での情報共有などが活発に行われた。

さらに、生徒の研究進捗を毎月のアンケート調査で把握し、整理した情報(探究テーマや所持する参考文献の冊数など)を図書館スタッフ間で共有。授業に直接関わる司書教諭だけでなく、カウンターに立つ他の図書館スタッフも生徒情報を把握し、学習グループに応じて図書を提供できるようにした。生徒には授業中の自由な図書館探索を推奨したこともあり、教室で司書教諭が研究指導やレファレンスに携わる一方、隣接する図書館では学校司書によるレファレンスが行われた。



研究指導とレファレンスを兼ねる司書教諭(図9)



研究進捗を鑑みながら書架でレファレンス(図10)



既卒生の卒業論文を輪読する生徒たち(図11)

年度を通じて生徒の興味関心(探究テーマ)と、図書館の蔵書を繋ぐことに注力。生徒と学校司書・司書教諭との関わりが深まることにより、生徒が図書館機能を気兼ねなく使えるようになった。

⁵⁾ 2020年度までは「自分たち(生徒)は社会課題に対して何ができるか」という名目で、アイデアを検討することを中心とした指導がなされていた。しかし先述してきた通り、図書を通じた学習や先行研究の調査が十分に行われず、実行可能性のないアイデア出しに終始してしまうこともまた、本カリキュラムの課題だった

5. カリキュラム改訂による効果の検証

一年間の課程を終えた 2022 年 3 月の時点で、カリキュラム改訂の効果を検証した。検証にあたっては、本稿(p.3/図 4)でも示した清教学園中高、三つの「探究学習」を比較した。すなわち、これまでも図書館活用が盛んだった中 3「卒業論文『なんでやねん』」と、今回の実践ではカリキュラムを改訂しなかった高 1「Global Studies I」、そして今回の実践でカリキュラムを改訂した高 2「Global Studies II」、三つの授業実践である。高 2 のカリキュラム改訂により、各実践の特徴は(図 12)のようにまとめ直すことができる。

	実施学年 (授業名称)	授業 担当者	学習 テーマ	テーマ 設定主体	学習者 単位	学習成果物 形式
比較 対象	中3 卒業論文 「なんでやねん」	司書 教諭 (2名)	学習者の 興味関心	学習者	個人	① 論文執筆 (1万字程度) ② ポスター (A4判/2p.)
比較 対象	高1 Global Studies I	教科 教諭 (2名)	社会課題 (SDGs)	授業者	グループ (4名程度)	発表スライド (日本語/10枚)
カリキュラム改訂 実践の比較対象	高2 Global Studies II	教科教諭 (2名) 司書教諭 (1名)	学習者の 興味関心 × 社会課題 (SDGs)	学習者 × 授業者	グループ (4名程度)	発表スライド (日本語/10枚) 研究抄録 (A4判/1p.)

効果検証で用いる比較対象(図 12)

上記三つの実践、それぞれから得られた各種統計データを比較した。検証に用いたデータは次の通りである。

① 授業評価アンケート

各学年の探究学習履修者全員を対象に実施。授業の設計及び、自己の学習経験に対する評価を質問。Web アンケートシステム(Google Forms)を用い、以下の回答者群を調査の対象とした。

- ・ 中 3 生(回答数 161 件 / 回収率 94.1%)
→従来より図書館を活用して論文執筆
- ・ 高 1 生(回答数 323 件 / 回収率 76.5%)
→前年度カリキュラムを踏襲
- ・ 高 2 生(回答数 345 件 / 回収率 86%)
→本実践でカリキュラム改訂を実施

② 図書館利用統計データ

清教学園図書館が採用する図書管理システム(LibMax)の利用統計データから、各学年の貸出冊数等を調査した。探究学習という教科の特性上、分析対象はノンフィクション資料のみとした。

③ 学習成果物の「参考文献一覧」

各学年の履修者の学習成果物を参照し、「参考文献一覧」に記載された文献数と内訳(図書/Web)を調査した。卒業論文(中 3)、研究抄録(高 1・高 2)を対象とした。

さらに、授業の効果を図るために用いた評価の観点は次の通りである。

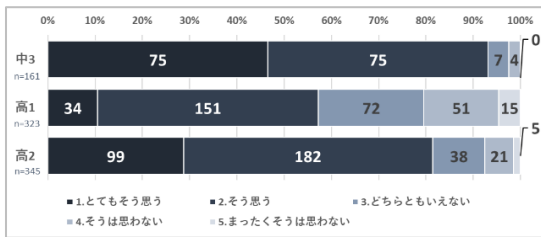
- 観点 1:主体的に授業に取り組んだか
- 観点 2:どれだけ図書館を活用したか
- 観点 3:どのように図書館を活用したか

上記三つの観点を、先に示した各学年のデータを用いて評価した。これにより、高 2「Global Studies II」のカリキュラム改訂が、中 3「卒業論文」や高 1「Global Studies I」の授業と比較した場合、どれほどの効果を持つのかを検証した。

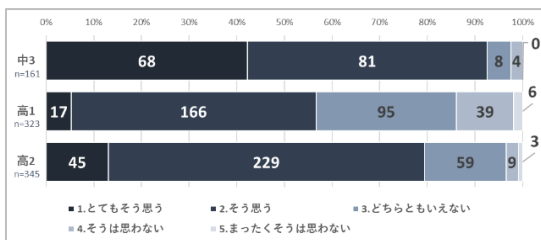
観点 1:主体的に授業に取り組んだか

(1)探究テーマへの興味と理解

先に実施した学習者(既卒生)に対するインタビューからは、主体的に取り組めるかどうかは、そもそも「テーマに興味を持っているかどうか」が重要であることが示唆された。そこで、各学年の学習者が主体的に授業に取り組んだか、その指標として「テーマに興味をもって取り組んだか」(図 13)「テーマの基本事項(定義/起源・歴史/現状)を理解しているか」(図 14)の二設問を用意した。



テーマに興味を持って学んだか(図 13)



テーマの基本事項(定義ほか)を理解しているか(図 14)

検証では、五件法のアンケート回答選択肢のうち、「とてもそう思う」「そう思う」を「ポジティブな回答」と定義。この回答の割合によって、各学年においてどれだけ学習者が主体的に学んでいたのかを分析した。各学年における二設問へのポジティブな回答の割合をまとめると、次のような順となった。

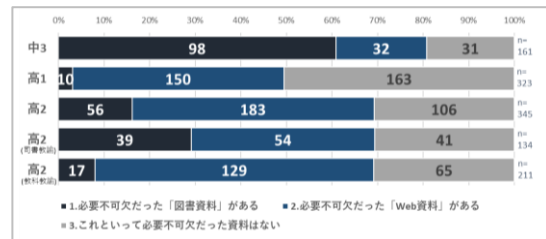
- ① 学習者主体のテーマ設定を重視する中3
興味:93.1% / 理解:92.5%
- ② テーマ設定主体を学習者に変更した高2
興味:81.4% / 理解:79.4%
- ③ 授業者がテーマ「SDGs」を設定する高1
興味:57.2% / 理解:56.6%

これは本稿 (p. 10/図 12) で示した「テーマ設定の主体」とも対応する。テーマ設定のイニシアチブが学習者にあるほど、より強い学習意欲が示された。

(2)参考文献を重視した学び

研究活動では参考文献が重要になる。とりわけ中高生は当該分野の初学者である場合がほとんどのため、重要な文献との出会いが学習経験をよりよいものとする。そこ

で、アンケートでは「研究完成に必要な不可欠だった資料はあるか」を調査した。「必要不可欠だ」と学習者自身が認識する資料の有無により、学習者がどれだけ文献調査を重視して学んだかを分析した。この分析結果もまた、「主体性」をはかるための指標として取り入れた。



研究完成に必要な不可欠だった資料の有無(図 15)

結果は(図 15)の通りとなり、ここでも授業カリキュラムにおける「テーマ設定の主体」の影響が示唆された。中3、高2、高1の順に、必要不可欠だった資料との出会いが多くあり、また資料の内訳を見ると、学習者主体のテーマ設定と、司書教諭が授業を担当した学年・クラスが、より「図書資料」を重視した学びとなっていたこともわかる。

さらに、上記「必要不可欠だった資料」の回答理由を問うた自由記述設問では、各学年の学習者からそれぞれの理由が説明された。たとえば、中3生や高2生からは「必要不可欠だった『図書資料』がある」と回答(中3:60.8% / 高2 司書教諭担当クラス:29.1%)した理由として、次のような記述が挙げられた。

- ・(分野の)知識を学ぶために重要な本だった。
- 一から詳細を学ぶために必要だった
- ・研究の中盤に行った取材の相手を書いた著作だった。文献を通じてこの相手に取材しなくなった。論文完成にかなり重要だった
- ・複数の文献をあたるうちに、似た記述内容や異なる記述内容を発見した。学ぶテーマの重要なトピックがなんとなくわかった

また、同一学年で「必要不可欠だった『Web 資料』がある」と回答した理由には、次のような記述が挙げられた。

- ・本に載っていないような最新の統計データが必要だったから Web 資料を使った
- ・SNS の投稿。ネットユーザーの声をデータ分析するために、一次資料として必要不可欠だった。本には載っていない情報だった
- ・大学の論文や政府の資料などがどうしても必要だった。図書館の先生に探してもらった

このような回答理由から、中 3 生や一部の高 2 生は、学習者自身が明確に、図書資料と Web 資料の特徴・利点を理解し使い分けていたことがわかる。

一方で教員主体のテーマ設定だった高 1 生は、そもそも「必要不可欠だった『図書資料』がある」を選択した生徒は少なく(3.0%)、「必要不可欠だった『Web 資料』がある」と回答した者(46.4%)の回答理由も、次に挙げる「簡便性」に基づいた回答がほとんどだった。

- ・図書館を使うのが面倒だったから(類似回答:本を返すのが面倒だから、等)
- ・Web はいつでも簡単に調べられて、グループ内で共有することができるから
- ・たくさんの一瞬で調べられるから(類似回答:効率がいいから、等)

先のグラフ(p. 11/図 15)でも示したように、高 1 生は「これとって必要だった資料はない」と回答した生徒の割合が三学年中で最も多く(50.4%)、多様な資料を用いて研究を行うという視座に欠けていたともいえる。

以上のことから、テーマ設定の主体が学習者にある授業ほど生徒が図書資料を多用し、さらに図書資料を多用している生徒ほど、図書と Web の特徴・利点を理解し意識的に使い

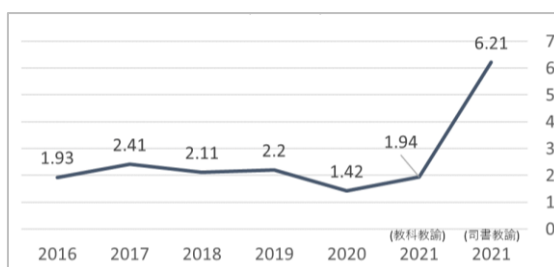
分けていることがわかった。一方、授業者がテーマを設定する授業であるほど、学習者は「必要不可欠な資料」と出会えず、また Web を用いた資料探索を行っても、「簡便性」に着目するが故の浅い資料探索に留まっていることがわかった。

観点 2: どれだけ図書館を活用したか

(1) ノンフィクション貸出冊数への影響

生徒が研究活動でどれだけ図書館を活用したのかを客観的に示すため、利用統計データから貸出冊数を分析した。ただし、普段のレクリエーションとしての読書が分析結果に影響を与えることを極力避けるため、調査対象はノンフィクション(0 類~8 類)のみとし、9 類の資料は除外した。

2021 年度の高 2 生一人当たりの年間貸出冊数は 3.6 冊。授業担当者で分けた場合、司書教諭担当クラスでは 6.2 冊、教科教諭担当クラスでは 1.9 冊となった。さらに、高 2 生過去 6 年分のノンフィクション貸出冊数推移は(図 16)のようになった。2021 年度高 2 生、とりわけ司書教諭が授業を担当した学級においては、前年から 4.8 冊の貸出冊数増加という向上がみられた。



高 2 生一人当たり年間貸出冊数推移(図 16)

グラフからは、高 2 の探究カリキュラム改訂と、授業中における学校司書や司書教諭の関わりが、高 2 生の実際の利用統計にも大きな影響を与えたことが示された。

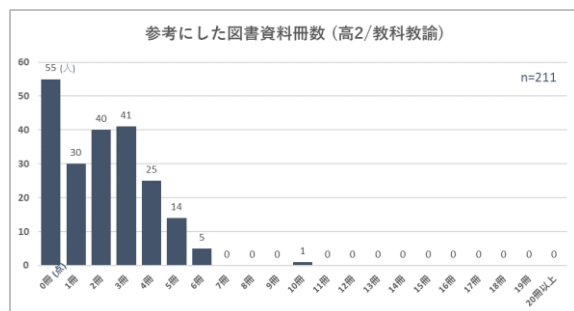
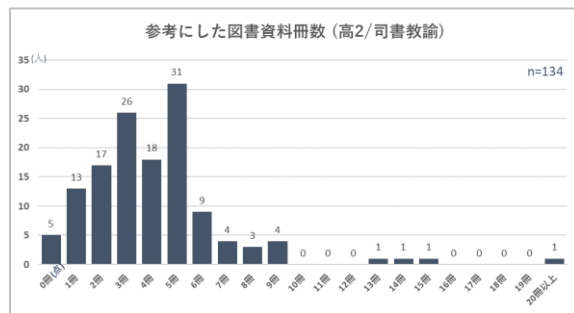
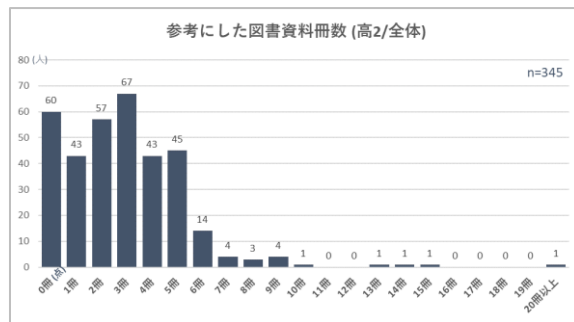
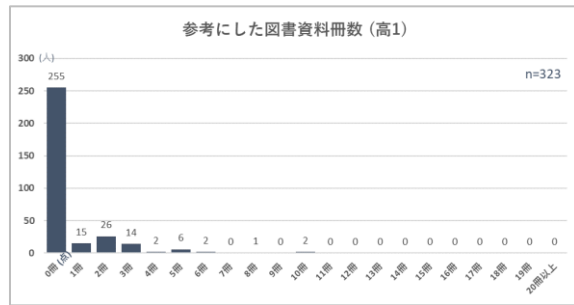
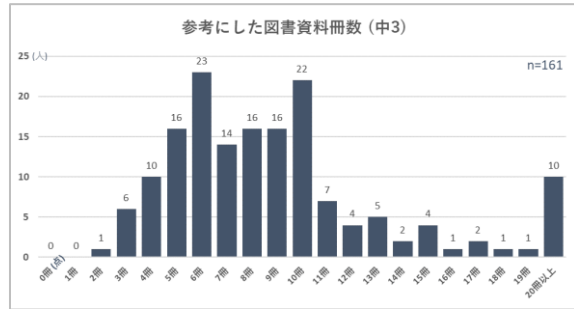
(2) 研究で参考にした図書資料冊数

「自分自身(個人)が研究で参考にした図書資料の冊数」を「0冊」から「20冊以上」の選択肢で問うた(図17)。このデータからも、授業カリキュラムにおける「テーマ設定の主体」の影響が強く示唆された。

学習者主体のテーマ設定で、生徒個々人が卒業論文を書く中3生は、99%の生徒が3冊以上、70%の生徒が6冊以上の図書資料を参考にした。また、カリキュラムを学習者主体のテーマ設定に改訂した高2生のうち、とりわけ司書教諭が授業を担当したクラスでは、70%の生徒が3冊以上の図書資料を参考にした。一方で、従来に引き続き授業者主体のテーマ設定(SDGs)で授業を行った高1では、3冊以上の資料を用いた生徒は8.3%に留まり、さらに1冊も図書資料を用いなかった生徒は78.9%に上った。このことから、学習者主体のテーマ設定と、学校司書・司書教諭の授業への介在が、図書館や図書資料を用いた探究活動に向かわせることがわかった。

ただし司書教諭不在のクラスで、教員による「図書を活用すべき」という声掛けがなかったわけではない。司書教諭が有する図書館活用についての専門知識は、授業スライドやプリントといった形で可能な限り教材化され、全ての授業担当者が各クラスにおいてその指導を担えるようになってきた。それでも(図17)のような資料活用の差が見られた背景には、学校司書・司書教諭の専門性が、単に教材化して共有できるものではないという事実が示唆される。

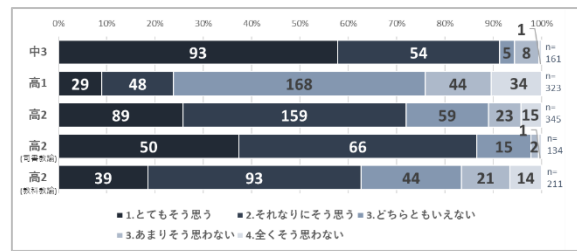
資料と生徒の学習を繋ぐための実践はむしろ、授業における学習者との対面のやり取りの中でこそ発揮された。授業カリキュラムに表れないこのようなやり取りが、学習者の学びにどのような効果を与えたのか。事項「観点3」で検討していく。



各学年の参考図書資料冊数(図17)

観点 3:どのように図書館を活用したか

学習者が「どのように図書館を活用したか」を測る指標として、「研究活動を通じて図書館機能(先生への資料相談、蔵書、施設)は頼れたか。あるいはそう思わなかったか(選択式)」を問うた(図 18)。さらにこの質問の理由を問うために、「その理由は何か(記述式)」と質問。これに対して高 2 生から得られた自由記述コメントからは、学習者がどのように図書館機能を活用したのか、あるいは活用しなかったのかが概括できる。得られた自由記述コメントを以下に抜粋する。



図書館機能(資料相談、蔵書、施設)は頼れたか(図 18)

(資料収集に関して)

- ・ たくさん本が置いてある図書館で自分が参考にしたい本を見つけることは大変だけど、司書の先生に言ったら「その本はこの分野にある」と教えてくれた。また、借りたい本の名前を言わなくても「こんな感じの本が欲しい」と言ったら、何冊も見つけてくれた。「どんな本を借りればいいのか悩んでいる」と言ったら、いろいろな種類の観点から書いた本を紹介してくれたので、とても頼ることができた。
- ・ 自分が欲しいと思っているような本について、「どんな内容のものが欲しいのか」やキーワードをちょっと伝えるだけで、次の授業までに準備をしてくださったので、とても助かった。今までは小説しか借りたことがなくて、研究で使ったようなノンフィクションがこんなにたくさんあったなんて知らなかったので、たくさん本から必要な本を選ぶのが大変だったけど、たくさん本があった分、自分にも読み易い本が見つけたので良かった。
- ・ こちらが頼んでいない時にも、司書の先生が私の研究テーマを分かってくれていて、授業中に本を勧めて下さった。その本が研究にすごく役立った。先生が「これとか研究テーマにあいそう」とたくさん本を持ってきてくれた。特に相談とかはしていなかったのに、知りたいことドンピシャで当てはまる文献をたくさん持ってきてくれて助かった。それに加えて、先生自身の知見を加えてくれてとてもわかりやすかった。
- ・ 司書の先生に本について聞くとわかりやすい本が 5、6 冊紹介してもらえて、とても研究に役立った。本の内容はすでに洗練された文章になっており、とても使いやすかった。
- ・ 自分一人で探すよりも効率的で、自分なら関係ないと思うような本まで見つけてきてくれてそれが関係あったり、助かった。
- ・ (自分が)図書室自体を使いこなして役に立てたというよりは、図書室の人がとても力になってくれた。本の題名やタイトルに自分の知りたいことが明記されていなくても、「〇〇に関して記述している本が知りたい」と言うとかくさんの本を別の視点から教えてくださり、その点で凄く役に立った。
- ・ 様々な本を紹介してくれて、本についてもどんなことが書いているのか読む前に説明してくれたため、どの本を読むか早く選べた。

(探究テーマの深まり)

- ・テーマ決めに役立った。なぜなら下調べの段階でその分野の本をある程度広い範囲で提示して下さったため具体的なテーマの方向を決める際に助かったから。
- ・Web と図書、2つの手段にはとてもおもしろい違いがあった。Web は、上手く検索すれば自分の知りたいことを最短で知れる。しかし、逆に言えばそれ以上も以下もないので、あまりテーマが広がらなかった。それに対して図書では、自分が知りたいことの他にも、付随する関連知識がたくさん述べられていて、「へえ、そーなんや」と思うことがいくつもあって、とても深く理解ができ、テーマも広がった。これこそが、今回の自分が研究した「不利益」に相当するものだと思って、とても実りのある研究となった。
- ・本を探している時に、図書館の先生に聞くとすぐに教えてくれた。自分たちが探している本だけでなく、研究に関連するおすすめの本も紹介してくれた。関連の本はテーマ決めに役立った。下調べの段階でその分野の本をある程度広い範囲で提示して下さったので、具体的な研究の方向を決める際に助かった。一見、自分たちのテーマと関係がないように見える本も、大事なことが書いてあったりして、多くの図書資料を参考にすることは研究をより深いものにするのには不可欠だった。
- ・研究に役立った。一見自分たちのリサーチクエスチョンと関係がないように見える本も大事なことが書いてあったりして、多くの図書資料を参考にすることは研究をより深いものにするのには不可欠だと思ったから。

上記のように、学習者は図書館機能を活用する上でも特に、学校司書・司書教諭のレファレンスに「頼れる」という実感を得ていた。記述内容は「資料収集」と「テーマへの影響」の二つに大別される。

(1)「資料収集」に対する信頼感

学校図書館でレファレンスに従事すれば日々目の当たりにするが、学習者は多くの場合、自分がどのような情報を求めているのか、言語化する術を持ち合わせていない。つまり、図書館で図書資料を探すにしても、Web 検索でキーワードを検討するにしても、自らが情報探索を行うその一歩としての検索語、「とっかかり」をそもそも持ち合わせていないケースが非常に多いのだ。そのようなケースは、中高生という言語の発達段階に由来することもあれば、探究活動で必須となる「調べ学習」が未熟である

ため、探究する分野・題材のシソーラスを学習者が持ち合わせていない、ということもある。

上記生徒コメントのうち、資料収集に関して「図書館を頼れる」と感じていた生徒の多くは、この点で学校司書・司書教諭に助けられていた。学校司書・司書教諭は専門職として、自館の蔵書に造詣が深いことや、未知の資料にたどり着く情報検索技術に優れていることがもちろん必要だ。しかしそれ以上に、言語化されることのない学習者の要求を、対面のやりとりによって引き出すことが求められる。

目の前の学習者が、どのような情報を求めているのか。なぜその題材に興味を持ったのか。研究のどのような段階にあるのか。自分たちはどのような仮説を持ち合わせているのか。会話の中から得られるそういった断片的な情報を繋ぎ合わせ、学習者

の求める探索対象を見極めていく必要がある。コメントにはしばしば「こんな感じの本」「キーワードをちょっと伝えるだけで」という言及があった。自身が言語化できなかった探索対象を、学校司書・司書教諭レファレンスによって具体化していく。そのような経験を経た学習者から、本稿(p.14)で示したようなコメントが挙がるのは自然なことだろう。

(2)「探究テーマ」の深まりと図書館活用

先に「学習者は求める情報が何かを言語化できない」ことを指摘したが、これと関連して、そもそも学習者自身も自らが何を知りたいのか、どのような情報が必要なのか、自らのテーマがどこに向かおうとしているのか、自覚的でないというケースも多い。そのように「無自覚」な学び、換言すれば「潜在的な知的好奇心」に働きかけることもまた学校司書・司書教諭の役割であり、(p.15)の生徒コメントでも、司書教諭とのやりとりや、紹介された参考文献との出会いにより、自らの潜在的な知的好奇心を引き出された学習者の経験が語られた。

探究学習の指導においては、学習者が学ぶ過程で探究テーマを深めていくという光景をしばしば目にする。よい参考資料との出会いや、フィールドワーク調査での発見などが、やがて最終的な探究テーマに昇華される。そういった学びこそが、学習指導要領の総合・探究の第一「自ら課題を見つけ自ら学ぶ」のあるべき姿といえるだろう。では、図書館活用によって探究テーマはどのように変遷したのか。例として、本稿(p.8)で探究学習開始当初の分野・題材を紹介した高2生の最終的なテーマと、彼らが用いた主要参考文献を挙げる。

・キャラクターの描き方

最終テーマ→清教学園の生徒会がさらに主体的な組織になるためには：マスコットキャラクター制作を通じたシンボルの発信
参考文献→『キャラクターとは何か』(小田切,2010)/『キャラクタービジネス:その構造と戦略』(土屋,1995)/『小池一夫のキャラクター原論キャラクターはこう生かす!』(小池,2001)

・大学受験

最終テーマ→志望先がなぜ地方大学ではいけないのか：大都市一極集中と大学受験の関連から地方過疎化を考える
参考文献→『今選ぶなら、地方小規模私立大学』(佐藤,2018)/『地方消滅』(増田,2014)/『蛍雪時代』(旺文社,2021)

・方向音痴の原因と対策

最終テーマ→便利ばかりが求められてよいのか：「方向オンチ」から検討する不利益という思想
参考文献→『方向オンチ矯正読本』(北村,2017)/『方向オンチの科学』(新垣,2001)/『不利益のススメ』(川上,2017)

今年度授業カリキュラムを改訂した高2生は、参考文献との出会いや司書教諭とのやりとりを通じて、探究テーマを変遷させていった。まさに、一年の探究活動を通じて、先に示した自らの「潜在的な知的好奇心」(=指導要領における「自ら見つける課題」)を発見する過程だった。そのような学習過程は、これまでみてきた既卒生への取材や、各種統計データからも明らかのように、自らの興味・関心から学びをスタートさせるという授業設計と、学校図書館の学習支援が前提にあった。

6. どのような探究カリキュラムが学校図書館活用を促進するか

2021年度の一年間を通じて行った、本実践研究の目的は、以下の三つの問いを明らかにすることだった。

- ① 授業に活用できる学校図書館の体制がすでに整っており、活用実績がありながらも、なぜ高校の探究学習では図書館機能が活用されないのか
- ② 図書館機能が活用されない理由を踏まえた上で、高校の探究カリキュラムをどのように改訂できるか
- ③ カリキュラムの改訂が、学習者の学びにどのような影響を与えるのか

最後にここまでの本稿の内容を振り返りながら上記の各問いに応え、本稿のテーマ「どのような探究カリキュラムが学校図書館活用を促進するか」に対する結論を述べる。

(1)なぜ高校の探究学習で図書館機能が活用されなかったのか

高校の探究学習に対する学習者と授業者、それぞれへの取材から、2020年度までの「Global Studies」においては学習者の主体性が発揮され辛くなっていたことがわかった。その要因として、「テーマ決定のイニシアチブが学習者自身にないこと」「テーマは社会課題の解決策模索であるべきという授業者の教育観」「授業設計のコスト意識」の三つが要因であることが示唆された。

過去の学習成果物や、図書館の利用統計データを見ると、中高の探究学習の間には図書及び図書館の活用について非常に大きな差があった。等しく「探究学習」を冠する授業であっても、授業設計や指導の方法により、図書館活用が大きく変化した。

もちろん、授業者自身がはじめから意図し

て「コスト」を意識するわけではない。探究学習で生徒に求める理想像としては「主体的に学んでほしい」「授業外でも積極的に取り組んでほしい」「図書館活用もしてほしい」などが挙げられた。その一方で、実際の指導ではそうもいかない現実が、授業者に「コスト」を意識させている。学校経営全体にまで視野を広げた場合、探究学習の教員数・授業コマ数といったリソースや、探究学習に費やす生徒の可処分時間の分配を考慮せざるを得ないという状況も明らかになった。

このため、探究学習において生徒が主体性を発揮するためには、単にひとつの授業のカリキュラム改訂や、図書館と授業者の関係づくりといった実践にとどまらない、学校経営そのものを包括的に検討せざるを得ない状況が垣間見えた。

(2)高校の探究カリキュラムをどのように改訂できるか

先の取材を踏まえ、高2「Global Studies II」のカリキュラムを「学習者主体のテーマ設定」に変更した。具体的には、授業者が「SDGs」のようなテーマを学習者に与え、学ばせる探究活動から、学習者が自らの進路志望や興味・関心に基づき学び、その後には研究テーマを設定する探究活動へ改訂した。これにより、学習者の研究動機には「興味・関心」という前提を保証しながらも、最終的には学んだ専門性を「SDGs」のような社会課題へと接続する探究活動となった。

さらに、学習者自身の多様な「興味・関心」に根差した探究活動を支えるべく、多様な蔵書で構成される学校図書館を活用できるようにした。授業カリキュラムと学校図書館活用を接続するため、司書教諭が授業を担当することによる「研究指導の充実」「レファレンス体制の充実」を図った。

(3)カリキュラムの改訂が、学習者の学びにどのような影響を与えたか

カリキュラム改訂の効果を検証するため、清教学園で実践される三つの探究学習を比較した。すなわち、これまでも図書館活用が盛んだった中3「卒業論文『なんでやねん』」と、今回の実践ではカリキュラムを改訂しなかった高1「Global Studies I」、そして今回の実践でカリキュラムを改訂した高2「Global Studies II」、三つの授業実践である。

検証結果からは、「学習者主体のテーマ設定」を採用する授業であるほど、生徒の学習意欲がより強く表れていたことが分かった。探究テーマへの興味、理解、必要不可欠だった参考文献、参考にした図書資料の冊数など、いずれのデータにおいても、最も「学習者主体」といえる中3生のデータにおいて、ポジティブな回答が多くあった。次いで、カリキュラムを改訂した高2生もポジティブな回答の割合が多くなり、同学年の一人当たりの年間貸出冊数(ノンフィクション資料)は、前年から最大4.8冊増加という向上がみられた。一方でカリキュラムを改訂せず、授業者主体のテーマ設定(社会課題の解決)を継続した高1生は、学習意欲を示すいずれのデータにおいても、ポジティブな回答は得られなかった。また、図書館活用も活発にはなされなかった。

さらに、図書館がどのように活用されたかを問う、高2生の自由記述設問からは、「資料収集時の学校司書・司書教諭に対する信頼感」と、「探究テーマの深まりと図書館活用の関係性」に言及するコメントが多く得られた。レファレンスによって学習者の「潜在的な知的好奇心」(=指導要領における「自ら見つける課題」)を引き出す学校司書・司書教諭の手腕が生徒に評価された。

(4)結論:生徒主体のテーマ設定と潜在的な知的好奇心を引き出すレファレンス

以上の振り返りから、本稿のテーマである「どのような探究カリキュラムが学校図書館活用を促進するか」に対する結論を述べる。結論は「生徒主体のテーマ設定と潜在的な知的好奇心を引き出すレファレンス」である。

学習者と授業者双方への取材、カリキュラム改訂、効果検証という、今回の一連の実践研究が示したように、「学習者主体のテーマ設定」で学ぶカリキュラムが、生徒の学習意欲を向上させ、より主体的に学ばせ、図書館活用を促進することがわかった。さらに、そのようなカリキュラムで学ぶ生徒は、学校司書・司書教諭の介在によって、自らの興味関心(探究テーマ)が図書館の蔵書と接続され、探究的な学びをより深めていたこともわかった。「自分が興味を持つ事をテーマに選ぶ」という授業設計が、学習者が本来持っている主体性とマッチし、よい学習経験に繋がったと考えられる。

学習者が興味・関心でテーマを設定し、専門家によって著された複数の文献を読みながら、学ぶ中で探究テーマを深めていくこと。このような学びが、学習指導要領の総合・探究の第一「自ら課題を見つけ自ら学ぶ」のあるべき姿といえるだろう。そのような学習者の学びを下支えする存在として、学校司書・司書教諭の専門性が発揮される。蔵書や情報探索に対する知見、そして学習者の「潜在的な知的好奇心」を具体化していくレファレンスは、興味を持って学ぶ学習者の探究をさらに促進させる。生徒のアンケート結果にも表れていた「図書館は頼れる」という信頼感はまさに、言語化しえない潜在的な知的好奇心が、図書館や学校司書・司書教諭によって引き出されていくという、学校図書館を用いた探究学習でしか成しえない学習経験に由来していたようである。

7. 今後の展望

今回の実践的研究からは、探究学習における図書館活用について、筆者が現場レベルで実感していた課題とその解決策が、ある程度具体的に見えてきた。本で学ぶという行為には、読解力や、難しい事を理解しようとする根気といった、ある種の知的体力が必要となる。そのような学びを支えるモチベーションとして、学習者が「学びのイニシアチブ」を握ることは、探究学習の前提条件だった。この前提が崩れたカリキュラムである以上、多くの生徒から「本は面倒だから読まない」「Webの方が楽に仕上げられる」という感想が漏れるのは仕方のない事だといえる。

授業における図書館活用は、ただ必要な情報を集め、「正解」を探すために利用すれば良いというわけではない。そういった利用だけが推進されるのでは、いずれ図書館はインターネットの利便性にとって代わられるだろう。そうならないためには、探究学習とは何かという根本から議論することが必要となる。授業者から与えられたテーマ(課題)に対して、その答えや解決策を考えることが探究なのか。もしくは、自らの興味・関心を深めていく中で、自分だけのオリジナルテーマに行きつくのか。多様な蔵書で構成される学校図書館は、後者のような探究学習でこそ活かされる場である。生徒個々人の多様な興味・関心に対して、専門家が生涯かけて著した図書資料を提供できる場だからだ。

また、図書というハードを整備するだけでなく、学校司書・司書教諭というソフトも非常に重要である。生徒を目の前にして、どういう本を、どのように手渡すべきか。ここに、学校図書館で働くスタッフの専門性が求められる。「君はどんなテーマで研究がしたいのだろうか」と、テーマ設定段階から生徒と関わること。そこから複数の資料を提供して、生徒の探究の可能性を広げること。この

ような、学習者の「潜在的な知的好奇心」に問いかけるレファレンスこそが、探究学習における最も重要な図書館の役割である。「学びのイニシアチブ」が、教員ではなく、生徒どうしの学習グループにおける力学でもなく、生徒個人に在る探究カリキュラムほど、図書館の専門性が発揮されるのだ。

しかし、本稿で取材した教科教諭が「コスト」に言及していたように、「学びのイニシアチブ」が生徒にあるような探究学習は、実際のところ手間がかかる。割り切った授業設計にならざるを得ない状況は、単に一つの授業カリキュラムの改訂では手に負えず、学校経営にまで解決策を求める必要がある。探究学習にどこまで力を入れるのか。どのように教員を配置し、どのようなカリキュラムで授業を構成するのか。枠や人材配置がなければ、志ある教員が疲弊し、また図書館の専門性も発揮されず、探究学習はやがて一過性のブームとして過ぎ去るのみだろう。

ただ、この状況に関しては追い風も感じる。一時期の「探究学習ブーム」を経て、世の実践は成熟を見せつつある。当初は社会課題の解決一辺倒だった探究テーマから、生徒の興味・関心の重視へ移行する学校も増えつつあり、そのような学校では、生徒の進路と探究学習の関連性も見えてきたようだ。また、それなりの「コスト」をかけなければ良い探究にはならないことも広く認知され始め、多様なテーマに合わせた潤沢な人員配置を行う学校も増えている。この時勢からも、学習者の探究に多様な蔵書で応えられる学校図書館は、今こそ真価を発揮する時だといえる。

8. 謝辞

本実践を進めるにあたり助言を頂いた塩谷京子先生(放送大学)、及び研究に協力して下さった在校生・卒業生・同僚の先生方に深く感謝を申し上げます。